

昭和歌謡 誕生物語

第1巻 自由曲 文・山川智

昭和30年——糸川英夫博士がペンシルロケット発射に成功。石原慎太郎は『太陽の季節』を発表。自由民主党が結成された。

そんな季節、聞こえてきた歌は17歳の可憐な少女のか細げき『泣き節』だった

へあかく咲く花 香い花
この世に咲く花 数々あれど
涙にぬれて 香のままに
散るは乙女の初恋の花

男は可憐な少女に弱い
これは万古不易の真実である
少女は実らぬ初恋を唄った
男たちは少女の恋しさに共鳴した
少女は苦勞知らずに明星となった
やがて少女は女に成熟した
苦勞はその後にやってきた
騙され騙され騙され……生きた
なのに、人を疑えぬ天眞は
希有にも天女の如く愛された
島倉千代子——



デビュー当時、17歳の島倉千代子。

200万枚の大ヒット。 この歌から彼女の 波瀾の人生が幕を開けた。

島倉千代子『この世の花』

昭 30年代初頭、東京ではフラフープとサック

ドレスというウエストライオンに切り替えない、ずんどう型のワンピースが流行した。そして、ラジオから繰り返し流れていたのが、島倉千代子の歌う『この世の花』だった。

この曲の元ネタは雑誌、明星に連載された北条誠の長編小説『愛する人の子を宿しながら、偽りの結婚に身を委ねる富豪令嬢の悲恋物語』だった。それがラジオで連続ドラマ化されると人気を博し、松竹による映画化が決定。主題歌を唄う歌手として白羽の矢が立ったのが、前年に『第五回コロムビア全国歌謡コンクー

ル』で優勝した島倉だった。

コロムビアとしても失敗は許されない。そこで、作詞に『東京行進曲』や『青い山脈』などを手掛けた西条八十、作曲には『リンゴの唄』の万城目正を起用。そんなこともあり、島倉のデビュー曲『この世の花』は200万枚売り上げを記録。当時17歳だった島倉の名を一気に全国区へと押し上げていったのである。

以来、喜劇を帯びた、島倉節。は数多くのヒットを飛ばした。だが、歌手として栄光の陰には波瀾の人生が待っていた。25歳で、元阪神タイガースの藤本勝巳と結婚するも、5年で離婚。その時彼女は身も

っていた。結果、妊娠三か月の子供を墮すことを決断。また、マネージャーや知人らの借金の保証人になり、10億円を超える借金を背負ったこともあった。だが、借金返済のため仕事を減らす、寝る間も惜しんで働く島倉を支え、自らを鼓舞させたのも、やはり歌だった。昭和63年に出した『人生いろいろ』は彼女の人生をオーバーラップさせ、大ヒットにつながった。

肝臓がんのため75歳で亡くなった島倉の葬儀が営まれたのは、平成25年11月14日のことだ。葬儀では、デビュー60周年に向け、亡くなる3日前に自宅でレコーディングされた新曲『からたちの小径』が流され、弔問客の涙を誘った。ま

さに全身全霊で歌った一曲だった。

「人生の最後にすばらしい時間がありがとうございまして」。そんなメッセージを残した彼女が眠る墓石には、「忍」という字が刻まれている。

ケガ、金銭問題、病氣……波瀾の人生は文字通り耐え忍ぶ人生でもあった。『この世の花』は、皮肉にも、そんな島倉の人生をスタートさせた曲でもあった。

Yamashita Chi

1962年東京生まれ、テレビ制作会社、週刊誌記者を経てフリーランスに。著書に『東方神起の謎』『東方神起』『Y&Yをゆく』『共にイースト・プレス』『ビュー・マインド・キョウメント 幸せのきずな』『ラブ・アルバム』など。また、出版プロデューサー・作家として『生きる 遺愛伝書（ベスト）』『生きる 遺愛伝書（ベスト）』『生きる 遺愛伝書（ベスト）』『生きる 遺愛伝書（ベスト）』など多数。